キズナエピソード

雪舟エリザ　3話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//とびお自室

俺がうだうだと自室で過ごしていると、

突然、電話の呼出音が鳴り響いた。

画面を見ると、エリザの名前が出ている。

「もしもし？　アナタ、秋葉原を案内しなさい」

「……は？　なんで？」

「なんで？　意外な返答ね。

　まさか、そう返されるとは思ってなかったわ」

//次ページ

「ワタクシ、コンピュータには詳しいわ。

　でも、日本のオタク文化は知らないの。

　これって珍妙奇天烈裏千家じゃない？」

「いや、お前の日本語はともかく、

オタク文化なんか知らなくても全くおかしくないが」

「またまた意外な返答ね。素晴らしいわ。

　意外な返答集でも持ってるのかしら？」

//次ページ

「とにかく、案内しなさい。

アナタみたいな人って、

秋葉原がテリトリーなんでしょ？」

そうして、電話は切られてしまった。

どうやらエリザにとって、

初めて会った場所がその人のテリトリーになるらしい。

//次ページ

どうしようか。

俺よりも秋葉原に詳しいクラスメイトはいる。

日本のオタク文化に詳しくなりたいんだったら、

あいつに案内させたほうが、より詳しくなれるだろう。

//次ページ

……いや、やめておこう。

エリザを一般人に合わせたら、絶対に話がこじれる。

クラスメイトから情報をもらって、自分が案内した方が懸命だ。

被害者はなるべく出したくない。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//秋葉原

［エリザ］

「す、すごいわ。このフィギュア

これが日本の伝統工芸、匠のワザなのね……」

［エリザ］

「え？　3D？　スマホで？

こんな小さいセットで、

3Dを体験できるわけ……ふわぁ～！」

［エリザ］

「すごいわ！　こんな本、書店で見たことないわよ？

……へー、同人誌っていうの？

すごく薄いのね。とってもエコじゃない！」

［エリザ］

「この大きな箱には、何が入っているのかしら？

エロゲ？　ゲームが入っているの？　おもしろそうね。

やりたいわ！　とびお、このゲームで勝負しましょ！」

［とびお］

俺は言われたとおり、エリザを案内した

彼女は目に映るもの全てが珍しいのか、

連れて行った先でいちいち驚きを見せる。

［とびお］

その姿は微笑ましく、可愛いものなのだが、

ただでさえ目立つエリザが行く先々で騒ぐものだから、

周囲の――特に男の視線が突き刺さって痛かった。

［エリザ

「すごいわ！　これが日本のオタク文化なのね！

ワタクシの想像の域を越えてるわ！」

［エリザ］

「そうだわ！　いくつか買っていきましょう！

名案だわ！　陽彩のおみやげにするのよ。

とびお、厳選しなさい」

［とびお］

「陽彩……？」

［エリザ］

「えぇ！

あの子でも、こんなものは知らないだろうから、

きっとびっくり仰天オドロオドロするわ！」

//暗転

//陽彩の家

［とびお］

そうして俺は、半ば無理矢理な形で

陽彩の家の前まで連れてこられたのだった。

エリザが隣で軽快にインターホンを鳴らしている。

//ピンポンを連打している音♪

［エリザ］

「陽彩ー？　もしもーし！ご在宅かしらー？」

［陽彩］

「……どうしかした？」

［エリザ］

「ワタクシ、今日、秋葉原に行ってきたの。

だから陽彩にお土産を買ってきてあげたわ！」

［とびお］

エリザは誇らしげに胸を張ると、

お土産一式が詰まった紙袋を陽彩へと手渡した。

［エリザ］

「どうかしら？　アナタでも知らないものばかりでしょ？

目ん玉がこぼれ落ちたかしら？」

［陽彩］

「……有名どころしかないね」

［エリザ］

「そうよ！　秋葉原は有名なんだから！」

［陽彩］

「ありがとう」

［とびお］

陽彩って子のあの反応……。

あれはアキバ文化を知ってる人間の反応だな。

エリザは意味を取り違えたみたいだが。

［とびお］

でも、きちんと礼を言う辺り、

あの子はエリザとの付き合いは長そうだ。

なんて言うか、エリザの扱い方を心得ている。

［陽彩］

「……ところでそこの人は誰？」

［エリザ］

「彼はA…とびおよ！

最近、一緒にあちこち行ってるの。

今日は彼がシメてる秋葉原を案内してくれたわ」

［とびお］

「はーい。無理やり案内を頼まれて、

一方的にあちこち連れ回されていまーす」

［陽彩］

「……要するに、エリザの恋人？」

［エリザ］

「……」

［エリザ］

「え？　こ、恋人!?　ち、違うわよ？

あ、それともボイコットって言ったのかしら？

ワタクシのボイコットって……何？」

［陽彩］

「恋人じゃないなら、友達？」

［エリザ］

「そそそう、それよ！　正解だわ！

ワタクシととびおは、ダチコーなの。

お、おわかりいただけただろうか？」

［陽彩］

「ふーん」

［とびお］

陽彩は表情を変えずにこちらを見ていたが、

一方のエリザは、いまだに口をあわあわさせたまま

顔を赤くしていた。

［とびお］

その姿はなんだかおもしろく、かわいかった。

//R18版の場合Rシーン挿入

//ADV形式終了

//3話終了